

もう一つの“アウシュビッツ”

大阪の中心部に3日滞在して15,000円というのはわるくない値段だろう。しかもすぐ近くには大阪城や、ホテル・ニューオータニが望めるという好立地である。

ただ、ちょっと我慢が必要な点がある。その宿は、エレベーターのない建物の地下2階にあるからだ。けちなことに、ライトも人が通るときだけしか付かない。当然、湿気が多く、冬は暖房もないので凍りつくような寒さだ。

申し訳ないことに、ベッドも毛布もないし、食事もあるかないかわからない。しかもぎゅうぎゅうづめで、座る余地さえない。最大の欠点は、1度そこに入ったら、2度と出してもらえないことだ。言い忘れたが、ここの常連客は、ホームレスや病氣、捨てられたという、犬たちである。

大阪府の森ノ宮保健所については聞いたことがあったし、付近の写真も見たことがあった。しかし行ってみるまで、こんな恐怖シーンを目撃するとは思ってもみなかった。森ノ宮保健所は、大阪のアウシュビッツとしかいいようがない。皮肉にも私の訪問は、花の万博を見た直後だったので、この両極端な姿はいっそう印象的だった。

大阪府はここに税金を3億円もつぎ込んで、年間2万匹の犬（小犬は含まず）を処分、つまり殺している。1匹当たり15,000円というわけだ。本来ならこれらは、犬を捨てたり、避妊手術をしなかった飼い主の肩に、すべての責任があるわけだ。しかし大阪府は、人間サマに住みよい環境作りという名目で、ごみと同じように犬たちを処分している。森ノ宮保健所は、きれいに飾られた花博の裏に隠された汚点である。このような保健所がジャパン・パッシングの新たな材料として湧き上がる前に、改善すべきだをつけ加えておこう。

一方、名古屋の保健所はかなり事情が違う。市民は自由に出入りでき、望めば動物をもらい受けることもできるし、ペットの世話の仕方についてもアドバイスが受けられ、PRも十分している。ところが森ノ宮の保健所は、市民から隔離されていて、私がしたように、自分の飼犬がいなくなったという口実でもないと入れない。ましてや、犬を譲り受けたいなどんでもないことで、たとえ動物にとっ